



# ネパールにおける映画製作・公開と ネパール映画の歴史と現状

伊藤敏朗

本誌2007年11月号でご紹介した、筆者の監督による劇映画『カタプタリ〜風の村の伝説〜』(51分)を、2008年3月、カトマンズで上映してきた。公開までの経緯と、この活動を通じて知ることができたネパール映画の歴史や現状について、ご報告したい。

## ネパールの文化と伝統的建物の大切さを訴えて

映画製作のきっかけは、2006年12月、千葉県立市川工業高校の菊池貞介先生が率いる「第4次国際技術ボランティア隊」に筆者が随行したことである。菊池先生は、同校の生徒たちと、パタン市の世界遺産の町並み調査と保存活動に精力的にとりくみながら、その意義をネパールの人々に穏やかに訴えていきたいと、静かに、しかし熱く語られた。筆者もその姿に触発されて、このテーマを自分の専門である映画で表現できないかと考えた。同隊の現地カウンターパートが、映画俳優のガネシュ・ラマ氏だったという奇遇が幸いし、滞在中に映画製作が決定。帰国すると、“神の山から下りてきた妖精の少女と、村の少年の交流を通して、ネパールの農村文化や歴史的建造物の大切さを訴える”というプロットのシナリオを書いてラマ氏に送った。ラマ氏は、ただちにこれをネパール語に翻訳し、製作準備に入った。

2007年2月、筆者は自分のゼミの学生2名(1名はネパール人留学生)と現地を再訪。ネパール側キャストとスタッフの献身的な協力のもとに撮影を行い、3月27日にクランクアップした。テープを日本に持ち帰って編集し、8月に三たび現地入りしてアフレコをやり、これをさらに日本で整音して完成させた。2007年12月31日大晦日の夜、本作の主なロケ地であったバタセララ村(注)に、本作を携えていき、満天の星空の下、完成屋外試写会を行なった。

2008年3月、菊池先生の第5次隊が現地入りして、これまでの研究成果のパネルを、同16日から18日までパタン博物館で展示した。筆者もこれと連携し、17日に、カトマンズ随一の映画館「ジャイネパール」にて、『カタプタリ』のプレミア上映会を開催した。

当日は、モーニングショーにも関わらず満場のお客様がおいで下さり、大きなスクリーンに映し出された美しい風景(撮影:アジット・バタライ)、名女優ミティラ・サルマさん(代表作『ムクンドー欲望の仮面』など)を

はじめとする出演者の演技、そして本作のテーマ性に、あたたかい拍手を頂戴した。

新聞やテレビでもとりあげられて好評を博し、著名な映画評論家ナレス・バタライ氏がラジオで、「この映画にはネパール人に郷土や文化の大切さを伝える強いメッセージ性がある。このような作品をネパール人監督が作れないのはなぜだ」と息巻いているのを聞いたときは、嬉しいようなこぼれのような思いがした。ただ、現在のネパールで、菊池先生と筆者が連携して、このようなテーマの表現活動を展開したことが、新鮮かつ有意義なものとして受けとめられたのであろうことは、理解できる気がした。



2008年3月17日、ジャイネパール劇場のプレミアショーで観客を出迎える『カタプタリ』のスタッフ・キャスト。

(写真: 菊池貞介先生提供)

## ネパール映画略史

ネパールにおいて映画は国民的娯楽だが、その歴史や実情はあまり知られておらず、文献や研究は乏しい。ネパール映画の黎明期について、筆者が知り得たところによれば、1951年に、ヒンディ映画『サッチャ・ハリスチャンドラ』が、D.B.パリヤによってネパール語に吹き替えられたとする記録があるが、そのフィルムは現在まで発見されておらず、どのように公開されたのかも判然としていない。

1960年、マヘンドラ国王は、インドの映画監督ヒラ・シン・カトリをネパールに招いた。政治的混乱のため、ヒラ・シンは一度インドに帰ったが、翌年に戻ってきて何本かのニュース映画を作った後、1964年に初のネパール国産映画『アマ(母)』を製作した(1965年公開)。1966年には、初の民間資本による映画『マイティガー